

18世紀英国における紅茶の女性性

How Tea Was Gendered as Feminine in Eighteenth-Century England

大野雅子（帝京大学外国語学部）

Masako ONO (Faculty of Language Studies, Teikyo University)

1. 和文アブストラクト

18世紀の英国において紅茶はなぜ女性的な飲み物としてジェンダー化されたのか。要因としては次の3つが考えられる。1) 宮廷の女性たちが紅茶を好んだことによって、上品で洗練された飲み物というイメージが獲得されたこと。2) 男性的なコーヒーとの二項対立関係のなかで女性的というイメージを強めていったこと。3) 中産階級の女性たちが「文化資本」として夫などの代わりに「代行的」に消費したこと。紅茶と女性の否定的な側面—おしゃべり、物欲、性欲、贅沢—が関連づけられた要因としては、次の2つが考えられる。1) 消費文化に対する恐怖が女性に対する恐怖とすりかえられたことによって、また、女性が欲望する姿がセクシュアルなものとして認識されたことによって、物質文化が「エロス化」されたこと。2) 消費文化が勃興したとき、西洋文学における女性蔑視の伝統が素地として機能し、消費文化と女性の否定的な側面が結びついたこと。

2. 英文アブストラクト

Analyzing the trope of “tea” and “women” in the poetical works written in eighteenth-century England such as Nahum Tate’s “Panacea; a Poem on Tea” (1702), Duncan Campbell’s “A Poem upon Tea” (1735), Alexander Pope’s *The Rape of the Lock* (1717), and John Gay’s “To a Lady on her Passion on Old China” (1725), this study observes how tea and tea-drinking are gendered as female, and how the women’s ritualized act of tea-drinking is made to be associated with their loquacity, their predilection for luxury, and their lewdness in eighteenth-century England, to participate in the discourse of misogyny. The study examines, further, how female subjectivity fuses with the object of its desire at the historical moment when gender and consumption intersect with each other. Women as the desiring subject is a construct created by the male fantasy of female promiscuity in the patriarchal discourse of eighteenth-century England - - the fantasy that tries to displace their anxiety for the rising consumerism as their fear for women.

3. 研究目的

18世紀の英文学（特に詩）において、「女性」と「紅茶」は否定的なニュアンスで結びついている。暇を持て余した女性が、高価な紅茶を飲みながら、おしゃべりに耽る様子は、西洋における女性蔑視の伝統をさらに強化するものになった。女性が紅茶を飲む行為は、「家庭」と「女性性」というイメージも喚起したが、それは同時に、「欲望」—「食欲」「物欲」「性欲」—とも絡みあったのである。18世紀の英文学において、「紅茶」と「女性」と「欲望」とがどのように関連づけられたのか、その表現方法を詳細に検討することによって、「紅茶」と「女性蔑視」との関連性を探求するのがこの研究の目的である。

4. 研究方法

*以下、「茶」と「紅茶」という二つの表現法をとる。その理由は、17世紀～18世紀にかけて英国で飲まれていたのは、主に緑茶（green tea）であったということである。人々は、緑茶に砂糖やミルクを入れて飲んでいて、緑茶と紅茶の違いは発酵度である。緑茶の発酵が進むと紅茶になる（途中段階に留まるとウーロン茶になる）。19世紀半ば以降、英国では紅茶（black tea）が主流になっていったと思われるが、本研究が対象とする時代はそれ以前である。本研究は、文学作品のなかに、高級な茶葉を買う行為と茶を飲む行為の象徴性を読解する試みであるので、茶の種類とは直接の関係はない。そのため、この報告書においては、茶の種類には言及しないが、論文や本などにする場合は、緑茶と紅茶の区別、また、緑茶から紅茶に移り変わる歴史的経緯も考察の対象としたい。

17～18世紀に書かれた以下の文学作品と批評書の読解を通じて、女性、紅茶、物質文化、欲望との関係を考察する。Nahum Tate (1652-1715年)、“Panacea; a Poem on Tea” (1702年)、Duncan Campbell, “A Poem upon Tea” (1735年)、Alexander Pope (1688-1744年)、*The Rape of the Lock* (1717年)、John Gay (1685-1732年)、“To a Lady on her Passion on Old China” (1725年)、John Webster (1580-1634年)、*The Duchess of Malfi* (1613-14年)。

最初の2つは文学史上の主要な作品ではない。大英図書館で原本を見ると、きれいな装丁が施された小さな本だった。当時の人々がポケットに入れて持ち歩いて読んでいたこと、時代の一般的な考え方が反映された詩であったことが想像される。Tateの“Panacea; a Poem on Tea”には、神秘の国・中国が生んだ奇跡の飲み物としての茶と、女性の欲望の対象としての茶という2つの側面が描かれている。Tateから33年後にCampbellによって書かれた“A Poem upon Tea”は、女性の否定的な側面—おしゃべりと上品ぶり—と紅茶とを結びつけ、女性を揶揄した詩である。

飲茶の習慣を始めたのは、王室の女性たちであった。このことも、紅茶を女性的飲み

物としてジェンダー化するのに一役かった。しかし、紅茶やそれを飲むための道具を熱心に買い求めたのが、貴族やジェントリー階級ではなく、商人たちであったというのは意外な事実である。これに関しては、当時の財産目録を調査した Lorna Weatherill, *Consumer Behaviour & Material Culture in Britain 1660-1760* に拠る。紅茶やそれを飲むための道具を嗜好したのは、のちに中産階級と呼ばれる層の女性たちであった。この欲望のメカニズムに関しては、Pierre Bourdieu, Thorstein Veblen, Werner Sombart の理論を用いる。

Pope の *The Rape of the Lock* においては、女性と重商主義とのイメージの重なり合いをみる。女性と女性を飾り立てる「物」との区別が消失すると、大航海は女性の欲望を満たすためになされるものだという論理が成立する。この論理の転換に関しては、Laura Brown, *Ends of Empire: Women and Ideology in Early Eighteenth-Century English Literature* に拠る。

女性という主体と「物」とのすりかえは、Gay の “To a Lady on her Passion on Old China” にあらわれるものでもある。この詩において主体と客体とが巧妙に逆転する様子を分析する。物質文化が「エロス化」されるのは、男性の側の重商主義に対する恐怖が女性に対する恐怖と重ね合わされるのが一つの理由ではあるが、欲望する女性の姿が男性の欲望をそそることももう一つの理由である。

最後に、John Webster, *The Duchess of Malfi* において、“luxurious” という言葉の意味の変遷をみる。17 世紀初頭に書かれたこの作品において“luxurious” は「好色な」という古い意味で使われているが、17 世紀後半以降「贅沢な」という意味が主流となっていく。「好色」と「贅沢」は、18 世紀英国における女性と紅茶を彩る概念であるが、この二つの概念が相互に親和性のあるものであったこと、一方が他方につながっていく概念であったことを、Oxford English Dictionary をみることによって証明する。

5. 研究成果

5-1. Nahum Tate の “Panacea; a Poem on Tea” における神秘の国・中国

Nahum Tate の “Panacea; a Poem on Tea” は、2 つの篇に分かれている。第 1 篇では、英国のパラモンという男が、世界中を旅して見識を深めて帰ってきたが、訪れた国々のなかで最も感銘を受けたのが中国だったこと、中国から持ち帰った茶を友人たちに供したところ皆が喜んだことが書かれている。パラモンが友人たちに語って聞かせたのが、以下のような茶誕生の物語だった。

紀元前の中国で政治が乱れ、「節約」の代わりに「怠惰」と「贅沢」がはびこった。そこに英雄が現れ、国の秩序を元に戻したが、贅沢三昧の習慣が人々に与えた影響をすぐに拭い去ることはできなかった。人々はあらゆる病気に苛まれ、昼はため息をつき、夜は不眠に悩まされた。宮廷人たちは、人々を疲弊状態からどのようにして

救うべきか、知恵を授けてもらうため、孔子の庵を訪ねた。宮廷人たちが到着すると、砂漠だったはずの大地から突如として茶の木が生えてきて、緑色の葉が生い茂った。その葉を煎じて飲むと、みるみるうちに元気になった。茶の効能によって、中国の人々の心も体も癒えたのであった。

第2篇は、ギリシャ・ローマ神話の女神たちが我こそは茶の木の守護神であると名乗りを上げ、抗争を繰り広げる、という内容である。女神たちは茶の木の守護神になるために、他の女神たちの悪口を言い募り、自分の長所を余すところなくアピールする。人間の女性たちと何ら変わるところなく、貪欲で喧しい女神たちの様子が描かれる。

5-2. Duncan Campbell の“A Poem upon Tea”における女性の物欲

Duncan Campbell の“A Poem upon Tea”の序文において詩人は、この詩を女性たちに捧げると宣言する。皮肉が含まれているように聞こえるかもしれないが、それは女性全般に向けられたものではなく、ごく少数の例外的な女性たちのことをいっているのだと言う。

詩は、女性たちが集まって紅茶を飲んでいる場面から始まる。「奥様、ボウヒー・ティーとグリーンティー、どちらになさいます？」(筆者訳；以下、英語からの引用はすべて同様)と女主人は訪問客に聞く。訪問客は「今までいただいたなかで一番上等なボウヒー・ティーですわ！」とお世辞を言う。詩人はあたかも物陰に隠れて一部始終を見ているかのようなスタンスで書いているが、彼自身の言葉も時折さしはさまれる。詩人が言うには、紅茶は、ワインなどのアルコール飲料と違って、人々を愉快にする飲み物である。女性たちが紅茶を飲みながら繰り広げる会話は音楽のように耳に心地よい。アルコールと違って、紅茶は健康を害することもないし、紅茶のせいで喧嘩や騒動が起きることもない。

アルコールで酔っぱらった男の下品な振舞いの例として、酒場での乱痴気騒ぎが描写される。アルコールは人を狂わせるのに対して、紅茶は「女性のきれいな手で準備され、ポットに入って女性のそばで淹れられるのを待っている」。紅茶は理性を曇らせることはないし、心を軽やかにし、消化も促進する。この詩のメインパートはこのようにして紅茶を賞賛することに終始する。

メインパートのあとに付け加わるのが、「紅顔のディックとかわいい唇のエイミーの会話、さらに、紅茶反対派への返答」である。ワイン派のディックと紅茶派のエイミーの議論はまったくの並行線だ。ディックは紅茶好きな女性たちを非難して、「仕事もせず家から家へと訪問を繰り返し」「そこにいない人たちの悪口を言う」と厳しい言葉を投げかける。しかし、エイミーが自分は「節約家」なのだと宣言すると、ディックは途端に態度を変えて、「僕の心と手を受け入れてくれ」と求婚する。エイミーは彼のプロ

ポーズを喜んで受け入れる。

5-3. 中産階級の女性の物欲

Lorna Weatherill による *Consumer Behaviour & Material Culture in Britain 1660-1760* は、1660 年から 1760 年の英国における財産目録に記された家庭用品を仔細に検討することによって、年代別、地域別、年収別、階級別など様々な観点から消費文化の動向を分析した研究書である。Weatherill が分析する家庭用品は以下である。テーブル、鍋やフライパン、錫製の食器類、土器、本、時計、絵画、鏡、テーブル・リネン、カーテン、ナイフとフォーク、陶磁器、温かい飲み物用の道具（砂糖壺、ミルクピッチャー、スプーン、茶葉入れ、その他）、銀または金製の品々。これらのうちのどれもが、1660 年から 1725 年の間に所有率が伸びているのだが、特にめざましいのが、陶磁器と温かい飲み物用の道具の所有率である。1675 年における陶磁器の所有率は 4%、温かい飲み物用の道具の所有率は 2%であったが、1725 年にはそれぞれ 80%と 96%になっている。時計の所有率も 56%から 88%へと大幅に伸びてはいるが、陶磁器と温かい飲み物用の道具の場合は、1675 年の時点ではほとんど存在していなかったも同然の状態からほぼ全家庭において見られる物になったという点において、きわめて顕著である。

私が注目するのは、階級・職業別の所有率である。Weatherill が作成した表のうち、貿易商、ジェントリー（土地所有者）、工芸品商、自作農、小作農の 4 つの職業カテゴリーにおける家庭用品の所有率を比較したものがある。この表をみると、興味深いことが判明する。陶磁器の所有率がジェントリーでは 6%にとどまるのに対して、貿易商では 10%もあるのだ。（工芸品商では 4%、自作農では 1%、小作農では 0%である。）

中国由来または中国産を真似てウェッジウッドなどが作り始めていた陶磁器は、当時大変高価なものであった。収入の上では商工業者を上回るはずのジェントリー階級の所有率が低いのはなぜなのか。逆に、ジェントリー階級よりも収入が低いはずの商工業者の陶磁器所有率が高いのはなぜなのか。6-3 の考察では、Weatherill による分析結果をさらに検討するとともに、Pierre Bourdieu, Thorstein Veblen, Werner Sombart を援用しながら、考察を述べる。中産階級の消費活動を女性が主導していたと思われたのはなぜなのか、ということも考察の対象とする。

5-4. Alexander Pope の *The Rape of the Lock* と物質文化のエロス化

女性は高級な茶葉を好む、女性は物欲が強い、消費活動の主な担い手は女性である—このような考え方がなされるようになったのはなぜなのか。5-3 でみた Weatherill による財産目録ではジェンダーの差は考察されていない。女性が使用した家庭用品であっても、その持ち主は男性であるがゆえに、女性の持ち物という認識はなされないからである。

消費文化はなぜ女性と関連づけられるのか。なぜ女性は高級な茶葉や陶磁器を買い集める強欲な性だとされたのか。18世紀の英国において消費文化と女性が結びつけられていった過程を、文学作品における修辞表現と関連させて論じたのが、**Laura Brown**, *Ends of Empire: Women and Ideology in Early Eighteenth-Century English Literature* である。その第4章 “Capitalizing on Women: Dress, Aesthetics, and Alexander Pope” をみる。Alexander Pope の *The Rape of the Lock* の最初の場面では、ヒロインの Belinda の朝の身仕度が描かれる。この詩において Belinda は主体としての声をほとんど与えられない。彼女自身よりも、彼女を美しく飾り立てる「物」—世界各地からもたらされた—があたかもそれ自体の命をもっているかのように主体となり、場面の中心となる。こちらの箱からはインド産の宝石が姿を現し、あちらの瓶からはアラビア産の香水が香りを放つ。亀と象は力を合わせて櫛を作る。Belinda は世界中の物によって飾り立てられるのである。

Belinda を飾り立てるのは、高価な物だけではない。Alexander Pope が駆使するレトリックも彼女を飾り立てる。Pope は Belinda を描写するためにふんだんに比喻表現を使い、この世で最も美しい女性であると賞賛するのだ。

Brown は、女性の服・装飾品が消費文化の「代喩 (synecdoche)」となっていると指摘するのだが、その理由として、初期の頃の英国の主な輸出品がウールであったことをあげている。英国文明の力は、全裸のアフリカ土着民にすら服をもたらしした。このことは、文明と服と英国の経済力が三位一体であったことを示している。裸の人間に服を着せることは商業活動の重要な部分であり、それゆえ、服・装飾品は商業活動の代喩となるのである。

The Rape of the Lock において服・装飾品がもっぱらヒロインの Belinda のものであったように、服・装飾品は女性のためのものだと認識された。消費活動が女性のものだとされた結果、何が生じたのだろうか。6-4 の考察で述べる。

5-5. John Gay の “To a Lady on her Passion on Old China” と、欲望の主体と客体

John Gay の “To a Lady on her Passion on Old China” という詩において、詩人の恋の相手、Laura は陶磁器に夢中だ。陶磁器のことを考えるとき、彼女の心は恍惚となり、目はとろんとなる。彼女はひたすら陶磁器に情熱を傾けているため、詩人には目もくれない。詩人は陶磁器と Laura を大いにほめたたえるのだが、詩人の真の意図は賞賛にあるのか、皮肉にあるのか、さらに、陶磁器と Laura のどちらが主体でどちらが比喻表現であるのかは曖昧である。

ここに古い陶磁器がある

白色、青色、金色の斑点入り

つややかで美しい陶磁器
まるで女性のように
器は実用的でなくとも
美しいから大事にされる
花模様、金色、空色に染めあげられて
家々を優雅に飾り立てる
磨き上げられた真っ白な肌
見ているだけうっとりする！
若いときは賞賛の的だった女性も
傷やひびのせいでその価値を失う
はかないがゆえに貴い女性
宝物とは高くつくものだ！（29-42行目）

陶磁器も女性も、家庭では無用の長物だが、その美しさゆえに大事にされる。実用的な存在ではないので、家の中を優雅に飾り立てるだけである。人々は陶磁器と女性を見てうっとりとする。陶磁器も女性も、「傷やひび」をその身に受けやすい、はかない存在だ。

上記の引用部分のあと、詩人はこの詩の主目的である、**Laura** への求愛を展開する。次のような論理だ。この世のものは移ろいやすい。宮廷人の昼の約束は夜には破られる。女房たちは田舎暮らしを退屈だと不平を言うが、いざ都会に連れて行けば浮気する。しかし、「賢い男たちの気持ち」は「より力強くより確かな基盤」に置かれているため、はかないものを軽蔑したりはしない。陶磁器のような女性と異なり、男は「もっと目の粗い材料」で出来ている。男は「頑丈な土器」のようだ。詩人は、このように求愛の論理的基盤を打ち立てたあと、**Laura** を口説き始める。

恋せよ、**Laura**、若いうちに
冬が来るたびに女の魅力は失われてゆく
女は陶磁器のようには売れない
古くなれば価値が下がる
今すぐ賢明な相手を選ぶがいい
誠実な男の心を傷つけてはいけない（67-72行目）

古代ローマの詩人ホラティウスの詩で使われた“*carpe diem*”がこの詩のモチーフとなっている。“*carpe diem*”は英語では“*Seize the day*”と訳されるが、「その日をつかめ」「その日のうちに花を摘め」ということであり、女性に対して若いうちに恋をしろと

勧める際にしばしば使われた技法である。有名なものとしては、17世紀前半、「形而上詩人」と呼ばれる詩人群の一角をなした Andrew Marvell (1621-1678年) による “To His Coy Mistress” がある。この詩において詩人は、早く恋をしないと、子宮に蜘蛛の巣ができてしまうと、奇想天外なイメージを使いながら、「恥ずかしがり屋の乙女」に自分の愛情を受け入れてくれと懇願する。

陶磁器の比喻や “carpe diem” のモチーフを使った “To a Lady on her Passion on Old China” は、消費文化と女性の関係に関して、どのような知見を与えてくれるだろうか。この詩の解釈に関しては、4-5の考察の項で述べる。

5-6. John Webster の *The Duchess of Malfi* と、物欲と性欲

5-4 と 5-5 においてみたように、女性が高級な商品—茶葉や茶を飲むための道具類—を欲望する姿は、エロティックなものとして表象される。女性が高級品を欲するイメージにおいては、物欲と性欲が区別なくうごめくのである。その結果、大航海に臨む男性たちにとって、女性は、アジア、アフリカ、アメリカなどで自らが行う貿易活動の「代喩」となる。

再び Laura Brown を引けば、「女性のセクシュアリティは商品としての女性という概念とイデオロギー的に親密である」ということだ。商品と女性とが同一化され、そこにおける物欲が性欲に変換されるのである。

物欲と性欲との親和性に関して、興味深い事実を発見した。時代を遡り、John Webster の *The Duchess of Malfi* をみってみる。Malfi 公爵夫人の双子の弟の Ferdinand は、姉が秘かに格下の男と再婚したことによって財産を盗られてしまうことに憤慨する。彼は姉の結婚に関して、「好色な (“luxurious”) 女は二度結婚する」(1幕2場) と吐き捨てるように言う。このセリフで用いられる “luxurious” という形容詞に注目したい。「好色な」という意味である。現代英語では「贅沢な」という意味で使われる “luxurious” が、17世紀においてはまだ「好色な」という意味で使われていたことは、18世紀において女性を巡って物欲と性欲とが相交わったことと関連があるように思われる。

“luxurious” という単語の意味の変遷を Oxford English Dictionary でみてみよう。1番の意味は、Lascivious, lecherous, unchaste (好色な、淫らな、浮気な) である。Obsolete (廃語) と記されている。現代ではもはや使われないということである。例文は、1330年頃から1697年までのものが載っている。2番の意味は1番の意味に近い。Outrageous, extravagant, excessive; also, passionately desirous *after* something (常軌を逸した、浪費する、過度な、激しく何かを追い求める) である。1374年頃から1665年までの例文が載っており、これもやはり Obsolete である。たとえば、1614年の例文は、“He..is not luxurious after acquaintance” (「彼は知己を求めることにそれほど熱心ではない」) である。1番の意味は性欲に限定されているが、2番の意味は、何らかの事柄や物に対

して執着を示す、という意味である。性に限らず、より広い意味における執着を表現した。

3番の a の意味は、1606 年以降用いられるようになった。人や習慣に関して、**Given to luxury, or self-indulgence, voluptuous** (贅沢好き、放縦な、貪欲な) ということである。3番の b の意味は、物事に関して、**Of or pertaining to luxury; characterized by or making a display of luxury** (贅沢に関係する、豪華な暮らしぶりをする、またはそれを見せびらかす) である。1650 年以降用いられるようになった。3番の a の例文の中で “luxurious” とともに使われる形容詞としては、**idle, proud, gay** などがある。3番の b の例文では、**a luxurious expression of love, luxurious wealth, a luxurious hotel** などの表現がある。

“luxurious”における、このような意味の変遷は何を示唆するだろうか。6-6 の考察において述べる。

6. 考察

6-1. Nahum Tate の“Panacea; a Poem on Tea”における神秘の国・中国

Tate の詩が出版されたのは、1702 年である。紅茶が英国に入ってきてから 50 年もたっていない。紅茶は神秘の国・中国の神秘の飲み物であった。詩のなかで紅茶を描写するためによく使われる形容詞は、**fragrant, foreign, sovereign, sacred, celestial, grateful** である。茶は、女性がおしゃべりしながらだらだらと時を過ごすための飲み物ではなく、人々の心と体を癒してくれる奇跡の飲み物として認識されていたことが了解される。

紅茶は英国に入ってきた当初から「女性」「贅沢」「物欲」というイメージを携えていたのではなかった。「東洋」を「西洋にとっての他者」として定義づけた Edward Said は、*Orientalism* において、「西洋」にとっての「東洋」とは「神秘的で、謎めいていて、暗く、内なる異質さを秘めている存在である」といったが、Tate の “Panacea; a Poem on Tea” の第 1 篇で描かれる茶の誕生の逸話はまさしく、中国を神秘の国として表象するものである。茶は、孔子の庵がある土地から突如として生えたものだった。お洒落な家の庭に生え出て、お上品な女性たちを喜ばせたのではなかった。高価な陶磁器を並べたティー・テーブルで暇をもて余した上流婦人たちがおしゃべりに興じるための道具となったのでもなかった。Tate の “Panacea; a Poem on Tea” における茶は、戦いが打ち続いて疲弊した国の民を心身ともに癒すために効果を発揮したのであった。

アヘン戦争前の中国はヨーロッパにとって未知の国であった。未知であったがゆえに脅威であったことは、たとえば、ロマン派の散文家 Thomas de Quincey (1785–1859 年) による *The Opium-Eater* (1821 年) においても表現されている。アヘンによって生み出される幻想と精神的肉体的苦痛の最中で主人公が懐古するのは、冬の炉辺で家族とともに飲んだ紅茶の記憶であった。紅茶が英国の習慣として認識される一方で、アヘンは中国のものとして認識されている。中国が脅威であるのは、溢れかえる人口が

いつ何時国境を越えてヨーロッパに向かって押し寄せてくるかわからないからである。

Tate の “Panacea; a Poem on Tea” の第 1 篇においては、未知の国であるがゆえに尊敬と脅威の対象であった中国が描かれている。第 2 篇は、西洋神話の女神たちの抗争の物語を語る。第 1 篇から第 2 篇への突然の変調に関しては何の説明もない。互いに異なる 2 つの篇は一体どのように関連しているのだろうか。突然の変調は一体何を示しているのだろうか。この謎を解くためには、紅茶が辿ったその後の道のりを考えてみる必要がある。

紅茶はヴィクトリア朝に至ると「英国的飲み物」となった。「異国」のものを「自国」のものにすることは、ポストコロニアリズムの用語を使えば、「搾取」することである。中国は「搾取」されることによって、背景に退く。この詩のなかには、茶が異国の珍奇な産物から「英国的飲み物」とされるに至るプロセスが表われているのである。

6-2. Duncan Campbell の“A Poem upon Tea”における女性の物欲

Campbell の詩は、Tate の詩から 33 年後に書かれている。この詩を読むと、33 年の間に紅茶が英国において女性のための飲み物に変貌していったことがわかる。Tate の詩におけるような、「東洋の神秘」という意味合いが詩のなかで表現されることはない。Julie E. Fromer は、*A Necessary Luxury: Tea in Victorian England* において、神秘の国・中国からもたらされた茶が「英国化」されるようになった理由として、英国人が中国産の茶葉に混じる不純物を取り除く努力をしたこと、英国では茶葉の重さを計ってあらかじめ袋に入れた状態で売られるようになったことを挙げている。茶葉の袋が表象するのは、英国と中国との間にまたがる地理的距離ではあるが、袋は中国産の茶葉を「英国化」し、神秘の国・中国を英国の領域内に取り込む役割も担っているのだと、Fromer は論じている。

この詩の主人公は女性たちである。そもそもなぜ紅茶は女性の飲み物になっていったのだろうか。一つには、英国王室の女性たちが紅茶を好んだことによって、高級でファッションブルな飲み物という価値づけがなされたからであった。英国の飲茶の風習は、王政復古によって王位についた Charles II（在位 1660-1685 年）のもとにポルトガルから嫁いだ Catherine of Braganza（1638-1705 年）によって始められたと言われている。彼女が「嫁入り道具」として英国にもたらしたものは、英国が世界との貿易に船出するために不可欠な拠点（インドのタンジールとボンベイ）と権益（当時ブラジルとポルトガルが所有していた西インド諸島に英国船が入港する権利）であったが、そのなかには、当時の英国ではかなりの贅沢品としてみなされていた陶磁器と茶葉もあった。Catherine of Braganza は東洋産の美しい陶磁器に淹れて紅茶を飲んだ。その習慣を眼近で見た宮廷の女性たちは、紅茶への憧れを強めていった。

名誉革命でフランスに逃れた James II（在位 1685-88 年）の娘で、オランダの William

III（在位 1689-1702 年）とともに王統を継いだ Mary II（在位 1689-1694 年）も、Mary の妹の Queen Anne（在位 1702-14 年）も、やはり東洋趣味の持ち主であった。彼女たちは紅茶を好んだのみならず、陶磁器のコレクターとしても有名であった。

このように、宮廷の女性たちが紅茶を好んだことによって、上品で洗練された女性のための飲み物＝紅茶というイメージが獲得されていき、上流階級の女性たちの間に飲茶の習慣が広がっていったのである。

紅茶が女性の飲み物になった理由としてもう一つ考えられるのは、コーヒー対紅茶の二項対立関係である。17 世紀イギリスの政治的状況は常に変動のなかにあった。そのなかで、飲んでも酔っぱらわないコーヒーと、それを飲ませるコーヒー・ハウスの重要性が高まっていく。男たちは政治的議論や情報交換を行うために、コーヒー・ハウスを利用した。Jürgen Habermas が『公共性の構造転換』において論ずるように、コーヒー・ハウスはイギリスにおける「市民的公共性」の形成に重要な役割を果たした。そのプロセスのなかで、コーヒーは、公共性、男性性、理性、政治というイメージと結びつけられていったのである。

男性＝公共空間＝コーヒー・ハウスという同一化が行われていたのとほぼ同時期に、二項対立的思考法から、女性＝家庭＝紅茶という同一化が行われていったのではないだろうか。

Leonore Davidoff と Catherine Hall による *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780-1850* によると、「家庭」という、外から区切られた空間が創られたのは、18 世紀末から 19 世紀にかけてであった。かつては農業、商業、工業などの労働の場と家族が日常生活を営む場所とは区別されていなかったが、19 世紀初頭までには、職住両方のための空間がダイニングルームとパーラーとに分かれていく。「パーラー」とは、上流階級の「居間 (drawing room)」の中産階級バージョンである。新しく形成されつつあった「家庭」という場所を創り出すのは女性の仕事だとされたが、パーラーに近所の女性たちを招いてティーパーティーを行うのも家庭の女性にとって一つの大きな役割だったのである。紅茶が家庭で女性が飲むものであるというイメージが形成されたのは、「家庭」の形成とも大いに関連がある。

このようにして、紅茶は女性の飲み物とされていったのだが、特に女性の否定的な側面と結びついていったのはなぜなのだろうか。Campbell の “A Poem upon Tea” に戻って考察しよう。

“A Poem upon Tea” には序がある。そこには、この詩の目的は女性と紅茶を賞賛することであると書かれている。この言葉を信用していいのだろうか。確かに、この詩は一見、紅茶とそれを飲む女性を大いに賞賛しているのだが、テキストの表面に表われる意味を裏切って、女性に対する手厳しい皮肉を垣間見ることができる。女主人と訪問客とのいかにも上品ぶったやりとり、高級な茶葉に対する嗜好、女性たちが茶を飲む

テーブルのそばで彼女たちを見ながら陶然と立ちすくむ給仕の少年、どこか近くにいて彼女たちを眺めているかのような口ぶりの詩人。ここにみられるのは、女性たちの気どり、贅沢、見られる存在としての女性である。

“A Poem upon Tea” の本篇のあとに付け加えられているのが、「紅顔のディックとかわいい唇のエイミーの会話、さらに、紅茶反対派への返答」であるが、ここにおいて、あたかも詩全体の結論のようにして唐突に立ち現れる「節約」という観点は、謎である。「節約」とは、男性たちが女性たちに求める価値であったと考えて間違いないであろう。

紅茶を飲む女性はなぜ否定的に表象されたのだろうか。「気どり、贅沢、見られる存在としての女性」というイメージを形成するにあたっては、一体どんな論理があったのだろうか。6-4において、「物質文化のエロス化」との関連において論じる。

6-3. 中産階級の女性の物欲

17世紀後半以降の消費文化の発展によって、英国では「中産階級」が形成されるようになる。それ以前の英国においては、土地を所有し働く必要のない上流階級（ジェントルマン階級）—貴族とジェントリー—と労働者階級（ノン・ジェントルマン階級）の2種類に分かれていたが、その間に形成されたのが「中産階級」であった。Jane Austen（1775-1817年）の小説などでは軽蔑の対象とされる職業人—弁護士や商売人—のうち、特に商売人がアメリカ、アジア、アフリカとの商業活動が進展するにつれ、大きな経済力を身につけるようになった。それによって、「中産階級」が誕生したのであった。

Weatherill が調査の対象とした 1660 年から 1760 年の時点では「中産階級」はまだ明確な階級を形成するには至ってはいないが、その経済力の高さは、陶磁器などの所有率がジェントリー階級よりもはるかに高いという事実如実に表れている。しかし、経済力が高いと、なぜ陶磁器を買うのだろうか。別の観点からも疑問を投げかけよう。なぜジェントリーよりも商人のほうが陶磁器の所有率が高いのだろうか。

陶磁器と温かい飲み物用の道具の所有率の上昇と、茶の輸入量の増加は大いに関係がある。トロイ・ビッカムの『イギリスが変えた世界の食卓』によると、1713年に広東が英国商人に開かれた結果、英国は、1716年までの4年間で17世紀全体を超える茶の量を輸入した。それに伴って、茶を飲むための道具の所有率も上がったのである。

本研究のトピックは「紅茶」であるが、財産目録に「紅茶」は記されない。紅茶を飲む行為において大きな部分を占めるのは、茶葉であると同時に、陶磁器である。ここでは、陶磁器という観点から飲茶の行為を論ずる。

上記で投げかけた疑問に答えるために、Pierre Bourdieu の「文化資本」という考え方を参考にする。富裕な商人はその富によって土地と家紋を買い、ジェントルマンの仲間入りをすることも可能であった。ジェントルマンの仲間入りをしたとしても、彼ら

新興のジェントルマンと代々続くジェントルマンの家系との大きな違いは、「文化資本」の有無であった。「文化資本」とは、「洗練された趣味」のことであり、それは、いくらお金を費やしても簡単に手に入れることができないものである。

「教養」は「文化資本」の重要な部分であるが、「教養」とともに、「物」に対する洗練された見識眼も「文化資本」となる。ジェントルマンの家系に生まれ育った人は、その出自と家柄だけで自らの優越性を証明することができるが、新しくジェントルマンの仲間入りをした人々は、古い家系のジェントルマンとの間に横たわる深い断層を何らかの手段によって超えなければならない。ジェントルマンという地位をお金で買うことができるようになったとき、消費活動における趣味がステータスを決める大きな決め手となったのである。

もともと身分の高い人々は陶磁器のような贅沢品を通じて自らの「文化資本」を自慢する必要はない。他方、新興富裕層の商人たちは、贅沢品を通じて「文化資本」を誇示する必要があった。Weatherill の財産目録では茶葉は言及されないが、陶磁器や温かい飲み物用の道具とは紅茶を飲むためのものである。茶葉に対する関心においてもやはり同様の現象がみられたことは想像にかたくない。

「物」に対する洗練された趣味が商人たちにとって「文化資本」になるということはわかった。しかし、ここで疑問なのは、もっと大きな「物」—たとえば、家屋敷—に対する洗練された趣味は「文化資本」として機能しなかったのであろうか、ということである。なぜ家庭用品だったのだろうか。この疑問を解くために、Werner Sombart と Thorstein Veblen をみてみよう。

Werner Sombart は、『恋愛と贅沢と資本主義』において、1200年から1800年にかけての「奢侈」の一般的発展の傾向として、屋内になってゆく傾向、即物的になってゆく傾向、感性化の傾向、繊細化の傾向、圧縮される傾向の4種類があることを指摘している。かつては祝祭日などに多数の家臣や従者を集めて飲食させることであった「奢侈」は、より短い時間内で日常的に（圧縮化）家庭内で（屋内化）品物を使うこと（即物化）に変わっていったのである。しかもその品物は動物的な本能につかえるような種類の物（感性化、繊細化）になった。Sombart はこれを「女性の勝利」と呼ぶ。

「奢侈」の性質が移り変わるとともに、「女性化」していったということであるが、女性と物欲との関係性をさらに追求するために、Thorstein Veblen をみてみよう。Veblen は『有閑階級の理論』において、「顕示的消費」と「代行的消費」という用語を使って消費生活について論じている。富を蓄積し閑暇を所有した階級はその富と閑暇を「顕示」したいと思う（「顕示的閑暇」と「顕示的消費」）。さらに、妻は、時間がない夫の代わりにその富を「代行的に」消費することが求められる（「代行的消費」）。Veblen はさらに、消費の原動力は、自分が属する階級よりも一段上に自分の生活レベルを引き上げることであるとも指摘している。

まとめていえば、洗練された趣味を「顕示」したいと思う女性は、夫の代わりに「代行的に」物を消費し、上の階級の消費活動を真似ようとしていた、という解釈になる。女性たちが紅茶や陶磁器を好んだことにはそのような背景があった。

6-4. Alexander Pope の *The Rape of the Lock* と物質文化のエロス化

5-4 に引き続いて、Laura Brown の論理を追っていこう。消費活動を女性の領域に転換する戦略として、Brown が着目するのは、anaphora（文頭反復）のテクニクである。*The Rape of the Lock* の少しあとに書かれ、明らかに *The Rape of the Lock* を模倣したと思われる、James Ralph の *Clarinda, or the Fair Libertine: A Poem in Four Cantos*（1729年）と、Soame Jenyns の *The Art of Dancing. A Poem*（1732年）の行頭で反復されるのは、For them と For you である。Them と you は女性たちを指す。「女性たちのために」たくさんの物が世界の様々な場所から奪取され、危険な航路・陸路を運ばれてきた。このような表現が詩のなかで何度も反復されたときに浮かび上がるのが、様々な「物」で着飾られた女性たちのイメージである。そして、「物」とそれによって着飾られる女性との区別が曖昧化する。女性というものは着飾る性だという認識が生ずる。

5-4 では「代喩」という言葉を用いたが、Brown はここでは「換喩（metonymy）」という言葉を用いている。換喩の論理によって、女性が物と交換されることによって、女性と「物」との同一化が生ずる。すると、大航海時代や海路の拡大という現象そのものがひとえに女性のためになされているのだという幻想が生じるのである。

女性と「物」とが同一化されるのには、もう一つの理由がある。女性の体またはセクシュアリティに対する恐怖の念は、勃興しつつあった消費文化に対する恐怖と同一化される。男性たちが遠い国の贅沢品を獲得したいと思った理由は、女性の欲望を満足させることであった。それゆえ、贅沢品は女性化される。贅沢品は女性のために獲得されるのだから、獲得のためのシステムそのものに対する責任が女性に課されるのである。女性も消費文化も恐怖の対象であるから、どちらも征服欲の対象になる。男性たちは女性の体も世界の商品も両方とも支配したいと思うのである。

トロイ・ビッカムの『イギリスが変えた世界の食卓』によると、18世紀に構築されつつあり19世紀に完成する大英帝国にあっては、茶を消費する女性も、貿易に関しての新聞記事や論評をタバコを吸いながら読む男性も、商品を通じて「想像の共同体」を形成した。どちらも、消費を通じて帝国の支配と貿易に結びつき、足を踏み入れたことのない植民地を想像した。そうすることで、自らが大英帝国の一員であるという認識をもった。英国人は「大英帝国を食い尽くす」ことによって、大英帝国の成長と繁栄を享受したのである。本研究が対象とするのはこれよりも前の時代であるが、18世紀は、重商主義と帝国主義が英国国民の生活を変化させ始めた出発点であったのである。

19世紀に至ると物質文化は男女両方が享受するものであり、恐怖の対象ではなかつ

たが、18 世紀においてそれはまだ女性同様に未知のものであり、恐怖の対象であった。だから物質文化は「女性化」された。別の言い方をすれば、「エロス化 (eroticization)」された。消費文化が女性というジェンダーと関連づけられるのは、「大航海がもたらした物を消費する女性」というイメージが「それによって利益を得る男性」のイメージを凌駕するからである。商業を通じて利益を得る男性たちは異国の物を身にまとう豪華な女性たちの背後に退く。利益を求めて航海する男性は主体の場から姿を消し、その代わりに、物を追い求める女性という主体が帝国主義を動かす最も大きな力として君臨するイメージが出来上がる。

6-5. John Gay の “To a Lady on her Passion on Old China” と、欲望の主体と客体

John Gay の “To a Lady on her Passion on Old China” における論理の展開はすばやく巧みだ。陶磁器に夢中な Laura を陶磁器にたとえる詩人。陶磁器のはかなさは世の中のはかなさを想起させる。世の中のはかなさのひとつの例として女性の移ろいやすい心とはかない美しさがある。詩人には女性の脆さを受けとめるだけの賢さがある。Laura は若いうちに恋をすべきだ。陶磁器のように彼女も傷を受けやすいのだから。陶磁器に対する情熱を詩人を愛することに向けるべきだ。ということで、Laura は陶磁器を愛する主体から、陶磁器のように美しい客体として存在するよう促されるのである。主体と客体とが区別なく混在し、「陶磁器に夢中な」Laura は当然のごとく陶磁器のようにはかなくも美しい。

陶磁器に夢中だから陶磁器にたとえられるのだろうか。Laura は、陶磁器のように美しいから自分と同じように美しい陶磁器を追い求めるのだろうか。どちらが原因でどちらが結果なのかは混乱した論理の中であって不明である。または、詩人はことさらそれを明確にしようとはしない。陶磁器好きだから陶磁器とそっくりになるのか、自分と似ているから陶磁器を好むのか、その論理をうやむやにすることによって、女性と陶磁器とを論理を超えたところで否応なく結びつけ、切っても切り離せない関係性を築き上げる。その結果、女性は脆くはかなく美しいと同時に脆くはかなく美しい物を愛する愚かさを持ち合わせているということになる。客体として脆い物は主体としても愚かしい。とにかく女性は愚かだという論理が出来上がる。

6-6. John Webster の *The Duchess of Malfi* と、物欲と性欲

John Webster が *The Duchess of Malfi* で用いた “luxurious” は「好色な」という意味であり、「贅沢な」という意味ではない。作品のなかで Malfi 公爵夫人が贅沢に明け暮れていると言及はまったくないし、公爵家の物質的富が作品のなかで描写されることもない。5-6 では OED をみて、“luxurious” が 17 世紀初頭以降、人に関して「贅沢な」という意味で、17 世紀半ば以降には、物に関して「贅沢な」という意味で使われ

始めたことを確認した。「好色な」という意味は、1697年の例を最後にして英語の語彙から消滅し、現代英語においてはもはやその意味で“luxurious”が使われることはない。「好色な」という意味と入れ替わるようにして、「贅沢な」という意味が現われ出したのである。*The Duchess of Malfi* は、“luxurious”の二つの意味—「好色」と「贅沢」—の交錯点に位置していたともいえよう。一方が消滅し始め、他方が主要な意味となりつつあった時代だったのである。事によると、*The Duchess of Malfi* における曖昧な使用法—少なくとも現代の観点からみると—によって、意味の移り変わりが促進されたのかもしれない。

「好色」から「贅沢」への移り変わりとは、「好色」と「贅沢」との重なり合いが我々に示唆することは、性に対する異常な情熱は、性以外の事柄に対する異常な情熱につながるということだ。

Malfi 公爵夫人は、再婚相手として選んだ元執事の Antonio と忠実な侍女の Cariola を除けば、男たちの様々な欲望が絡まりあう宮廷社会の中でたったひとりだ。弟の Ferdinand の観点からすると、姉は肉欲を満たすために元執事と結婚したということになる。女性が自由に結婚相手を選択したということだけで、それは肉欲の発現だと思われたのである。公爵夫人という主体も、彼女の意思と行動も、男たちの文法と構文で表現されている。公爵夫人のセクシュアリティは彼女自身の表明によるものではなく、男たちの解釈によるものだ。

7. 結論

紅茶が女性の飲み物とされたことを前提として論を進めてきたように思われるであろう。その根拠は一体どこにあるのか、という疑問を呈されるかもしれない。この報告書において根拠としてあげたのは、Nahum Tate と Duncan Campbell の詩であるが、これらの詩は決して特殊なものではない。J. B. Writing-master という署名のもと原稿が残っている“In Praise of Tea: A Poem”（1736年）も、Tate と Campbell の詩同様に、紅茶好きの女性に対する皮肉に満ちた詩だ。Eliza Haywood（1693?-1756年）が書いた *Tea-Table*（1725年）という散文は、優しい性格で皆から愛されている Amiana のもとに男女が集り、代わる代わる話を披露するという趣向の物語であるが、ティーテーブルを仕切るのは Amiana である。Eliza Haywood が発行していた *The Female Spectator*（1744-1746年）に寄せられた John Careful という男の悩み相談では、妻は目を覚ますやいなや女中に紅茶を淹れさせ、ゆったりとした椅子に腰掛けてそれを啜るそうだ。*The Tea Drinking Wife and Drunken Husband*（1749年）においても事情は同じである。夫は妻が紅茶好きであり、そのために怠惰であることに対して不満をぶちまけている。

英国で始めて“tea”という言葉がお目見えしたのは、Thomas Garaway による公告（1660年）である（Garaway が茶を売り始めたのは1657年であると言われる）。そこ

には、茶の効用は「頭痛、結石、水腫、壊血病、記憶喪失、腹痛、下痢、恐ろしい夢などの症状」を治すことにあるとあり、茶が最初は薬として飲まれたことがわかる内容である。161年後、Thomas de Quincey の *The Opium-Eater* で主人公は、アヘンによって生み出される幻想と精神的肉体的苦痛の最中で、冬の炉辺で家族とともに飲んだ紅茶をなつかしく思い出す。ここにおいて紅茶は、女性的飲み物というよりは、英国的飲み物に変貌していた。しかし、Jane Austen の *Pride and Prejudice* (1813年) や、Emily Bronte (1818-1848年) の *Wuthering Heights* (1847年) を読むと、女性的飲み物としての紅茶のイメージがなお根強く残っていることに気がつくのである。

18世紀の英国において、茶が女性的な飲み物としてジェンダー化されていった要因は、次の3つにあると考える。

1) 王室の女性たちの影響：Charles II のもとに嫁いだ Catherine of Braganza が、英国よりも早くに大航海時代に突入していた祖国のポルトガルから様々な新奇な品物を嫁入り道具としてもってきたが、そのなかに茶があったことである。王妃が嗜んだ飲茶の習慣が上流階級の女性たちの間に広まっていったことは、英国で最も早い時期にお茶を飲んだと言われる Duchess of Lauderdale (1626-98年) によっても証明される。彼女は、父から受け継いだ Ham House という屋敷を中国製家具や陶磁器で飾りつけ、屋敷の中に最先端の流行と最高級の贅沢を現出した。Richmond の近く、テムズ川の河畔に立ち、ナショナルトラストの手厚い保護のもと当時の姿を留める Ham House では、Duchess of Lauderdale が友人たちにお茶をふるまったとされる私室が当時の様子を再現する。その私室で展示されているのは、プリンスウッドのライティング・デスク、漆塗りの椅子、ジャヴァ製のテーブルなどである。テーブルの上には白い釉薬を塗った中国製のティー・ポットとティー・カップ2揃えがある。そのクリーム色のティー・ポットから注がれたのが、英国で最初の何杯目かの紅茶であった。

2) コーヒーと紅茶の二項対立関係：1649年の Charles I (在位 1625-49年) の処刑以降、イギリスの政治的状況は常に変動の中にあつた。1658年に Oliver Cromwell (1599-1658年) が死んでからは人々の心は共和制と王政復古の間で定まることなく揺れていた。新聞、雑誌、風刺詩、日記など様々な形態の印刷物が出版されるなか、そのような印刷物を容易に手にすることができ、また、他の人々と政治的議論や情報交換や気軽な会話を行うことのできる場所としてのコーヒー・ハウスの重要性は高まっていった。コーヒーは「真っ黒で地獄のような飲み物」と言われ、上品で高級な飲み物とはみなされなかった。また、コーヒーの豆を挽く、豆を炒るなどの作業はある程度の力を必要とする。コーヒー・ハウスとコーヒーが男性的とされると、二項対立関係のなかで、紅茶は女性的という色合いを強めていったのではないか。

3) 中産階級の女性たちによる「代行的消費」：茶が英国にやってきた時代は、英国が、ヨーロッパの他の国々の後塵を拝して、大航海時代に突入した時代であった。世界か

ら様々な品々がもたらされたことによって、英国では商業革命が起こりつつあった。大航海と商業革命によって、階級構成にも変化が起こった。王室と貴族から成る上流階級と労働者階級、すなわち、ジェントルマンとノン・ジェントルマンという 2 種類の階級の間、中産階級が生まれることになる。中産階級は土地と家紋を買うことによってジェントルマンの仲間入りをするにはできたが、Bourdieu のいう「文化資本」を手に入れることは容易ではない。ジェントルマンであることを証明するものとして「物」に対する鑑識眼があった。また、Veblen がいうように、女性は夫などの代わりに「代行的」に消費する。さらに、Weatherill の調査にあるように、新しい物に対する消費意欲が強いのは商人たちである。ということは、商人またはのちの中産階級に属する女性たちが最も多くの紅茶を購入したということになる。

紅茶と女性の否定的な側面が関連づけられた要因としては、次の 2 つが考えられる。

1) 物質文化の「エロス化」: 実際に、茶葉や茶を飲むための道具を購入することに意欲的だったのが男性ではなく女性であったかどうかはわからない。財産目録は男性の名前で登録されているため、購買を主導したのが誰なのかは記されていない。Veblen のいう「代行的消費」とは、現代にも通ずる考え方である。夫の富の証として夫人が高価な物を身につけるとのことだ。「代行的」に消費するだけでは、女性は責めの対象とはならない。この報告書で分析した様々な詩において、女性の物欲の激しさに対する皮肉が展開されているのは、論理の転換によるものだ。男性は女性を物欲が激しい性だと思いたい。一つには、消費文化という未知のものに対する恐怖を、女性という異質な性に対する恐怖とすりかえたいからである。男性が苦勞して遠いところから品物を運んでくるのは、ひとえに女性のためであると思いたいのである。二つ目には、欲望する女性はエロティックであるからである。女性と「物」とが「代喩」的にすりかえられ、女性は客体化されるのだが、同時に、女性は「物」を欲望する主体でもある。主体としての女性が客体としての女性自身を欲望する姿はエロティックである。このようにして、物質文化はセクシュアルなものとして認識されるのである。

2) 西洋文学における女性蔑視の伝統: 聖書においてイヴが禁断の木の実を食べた貪欲な女性として描かれて以来、キリスト教圏または西洋的伝統において女性は劣った性として認識されてきた。たとえば、Geoffrey Chaucer (1343?-1400 年) の *Troilus and Criseyde* の終わりは *palinode* (前言撤回) という手法をとっている。トロイ戦争の最中のトロイで Troilus と Criseyde は愛を誓いあうが、Criseyde はギリシャに引き渡されることになり、彼の地で Troilus を裏切ってしまう。物語の終わりに作者は、恋などむなしなもの、女など信じるに足らぬものといい、これまで語ってきた愛の物語をすべて否定する。愛を称揚してきたかにみえた作者の意図は、実はその否定にあったということが最後にわかる仕組みである。女性は裏切る性であるというのは、アーサー王伝説におけるアーサーの王妃 Guinevere にも典型的に表れている。Guinevere と Lancelot

の姦通は、アーサーの王国を崩壊へと導いたのであった。アダムを裏切って蛇＝サタンの側についたイヴ同様、CriseydeもGuinevereも、愛する人を裏切って他の男性になびいた。このように、西洋文学の伝統において、女性は否定的に描かれてきた。消費文化が勃興してきたとき、このような伝統が素地として機能することによって、消費文化の否定的な側面と女性の否定的な側面は容易に結びついたのである。

このように本研究は紅茶に付随する意味を分析するものである。飲み物や食べ物は、欠乏の時代にあっては量を見せつけるだけで地位の誇示となったが、ある程度の量を皆が飲んだり食べたりできるような時代になると、趣味のよさ、鑑定眼が必要となる（トロイ・ビッカム『イギリスが変えた世界の食卓』）。何をどのように飲んだり食べたりすると上品なのかという観点から、その飲食物に象徴性が付与されるようになる。特に紅茶のような嗜好品においては、象徴性がその嗜好を左右するという側面は大きい。

今後の検討事項としては、歴史的な考察とデータの分析が必要である。英国にもちこまれた茶の量と値段、緑茶から紅茶への移り変わりなどのデータを分析することは、文学を専門とする筆者の研究の守備範囲ではないが、文学作品の分析を通して紅茶と女性の否定的な側面とを論ずるにあたって、不可欠な情報である。本研究をさらに進めるためには、文学的、歴史的、社会学的、経済学的、様々な視点から、学際的に論じていく必要がある。

8. 引用文献

- Bicham, Troy. *Eating the Empire: Food and Society in Eighteenth-Century Britain*. London: Reaktion Books, 2020. トロイ・ビッカム著、大間知知子訳、『イギリスが変えた世界の食卓』、原書房、2022。
- Bourdieu, Pierre. ピエール・ブルデュー著、石井洋二郎訳、『ディスタシオン（社会的判断力批判）I』、藤原書店、1990。
- Brown, Laura. *Ends of Empire: Women and Ideology in Early Eighteenth-Century English Literature*. Ithaca and London: Cornell UP, 1993.
- Campbell, Duncan. “A Poem upon Tea.” 1735. British Library.
- Davidoff, Leonore, and Catherine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780-1850*. 1987; London and New York: Routledge, 2002.
- De Quincey, Thomas. *Confessions of an English Opium Eater*. Arcturus Publishing Ltd., 2019.
- Fromer, Julie E. *A Necessary Luxury: Tea in Victorian England*. Ohio: Ohio University Press, 2008.
- Gay, John. “To a Lady on her Passion on Old China.” 1725. British Library.
- Habermas, Jürgen. ユルゲン・ハーバーマス著、細谷貞雄、山田正行訳、『公共性の構造

- 転換—市民社会の一カテゴリーについての探求』、未来社、1973。
- Pope, Alexander. *The Rape of the Lock*. Ed. Cynthia Wall. Bedford Cultural Edition. Boston and New York: Bedford Books, 1998.
- Said, Edward. *Orientalism*. 1978; New York: Vintage Books, 1979.
- Sombart, Werner. ヴェルナー・ゾンバルト著、金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』、講談社学術文庫、2000。
- Tate, Nahum. “Panacea; a Poem on Tea.” 1702. British Library.
- Veblen, Thorstein. ソースティン・ヴェブレン著、高哲男訳、『有閑階級の理論』、ちくま学芸文庫、1998。
- Weatherill, Lorna. *Consumer Behaviour & Material Culture in Britain 1660-1760*. 1988; London and New York: Routledge, 1996.
- Webster, John. *The Duchess of Malfi*. Ed. Leah S. Marcus. London, New Delhi, New York and Sydney: Bloomsbury, 2009.